

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担総合総括研究報告書

男性不妊の実態及び治療等に関する研究

分担研究者名 三浦一陽 東邦大学医学部第一泌尿器科教授

A．研究目的 = 男性不妊の本邦における患者実態については今だ不明な点が多い。また男性不妊の診断や治療における最近の動向を知る目的で研究を行った。

B．研究方法 = 泌尿器科指導医のいる施設に男性不妊患者数を知る目的で調査を行った。1998 年は前年の調査で男性不妊治療している施設に調査を行った。また、男性不妊症の治療に中心的役割を果たしている全国 10 の大学病院泌尿器科の診断や各治療面の内容について調査した。

C．結果と考察 = 全国調査の男性不妊症患者は 1997 年 5,863 名、1998 年は調査施設が前年の約半数にもかかわらず 4,611 名であった。合計 10,474 名であり、年々増加傾向にある。また病床数の多い病院ほど男性不妊の診療率が高くなっている。これは 2 年間とも同様の傾向であった。

10 大学病院泌尿器科では男性不妊症患者が 2,545 名と全国調査の 24.3% を占めていた。男性不妊原因のうち、精巣因子がほとんどで約 8 割を占め、ついで精路因子、性機能障害であった。治療面では非ホルモン療法が大多数であり、単・2 剤投与の妊娠率が良かった。ホルモン療法ではクエン酸

クロミフェンが多く、50mg 群で妊娠率が良かった。

手術療法では精索静脈瘤に対する内精静脈結紮術で累積妊娠率は 1 年で 18.1%、2 年で 49.0% と高率であった。また精路閉塞に対する再建術では出産が 4 例と少なく、補助生殖医療に頼る面が多かった。性勃起障害による不妊が増加を示し、クエン酸シルデナフィルで、高い改善率を示し短期間ではあるが 6 例に妊娠を認めた。一方、射精障害は治療が大変困難で補助生殖医療に頼っているのが現状である。10 大学における補助生殖医療の現状では増加の一途をたどり、特に TESE は無精子症の精子回収法として画期的なものであり、今後は TESE-ICSI が急増するものと予想される。

D．結論 = 男性不妊患者は意識の改革か、年々治療者が増加している。その反面、泌尿器科的診察もなしに補助生殖医療を受ける傾向にある。今後、無精子症の精子回収法として TESE は急増すると予想される。